

平成 28 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	三谷 雅純
研究テーマ	言語音がわかりにくい高次脳機能障がい者に適した放送音声の工夫

<助成研究の要旨>

申請者はこれまで、さまざまな立場の高次脳機能障がい者とながら研究してきた。その中で比較的規模の大きな団体には、ひょうご失語症者家族会と兵庫県言語聴覚士会がある。本研究ではこれらの団体を対象に、肉声に視聴覚情報を付加した音声の理解に関する視聴覚実験を対面形式で行い、高次脳機能障がい者に理解しやすい放送法のあり方を探った。具体的には明石市「むつみ会」、尼崎市「いなば会」、兵庫県南部の参加者からなる「若者と家族の会」、および三田市「トークゆうゆう」に協力を仰ぎ、それぞれの高次脳機能障がい者、特に失語症者を被験者にして、音声の聞き取りやすさ／聞き取りにくさを調べた。同時に高次脳機能障がいがないと自覚している被験者（この実験では非障がい者と呼ぶ）にも同様の実験を受けてもらい、対照群とした。聴覚実験の素材には関西テレビ CSR の技術的援助を受けて録音した職業アナウンサーの肉声をデジタル録音して使用した。一回の実験では時間や場所に限りがあるため、20 名程度の被験者に集まってもらい行った。実験は十分なデータサイズを確保するために複数回、異なる団体に対して行った。高次脳機能障がい当事者のべ 32 名と、対照群として介助者と言語聴覚士合わせて 20 名、計 52 名が被験者として参加した。

以下に結果と議論をまとめる。

男女のアナウンサーに「棒読み」と「リズムを強調した読み」で吹き込んでもらった素材を、(1) 非障がい者、(2) 日常聞くことに、時には不便がある軽度の高次脳機能障がい者、(3) 日常聞くことに常に不便がある中・重度高次脳機能障がい者が聞いた時、理解しやすいかどうかを、当事者の主観で答えてもらった。その結果、女性アナウンサーでは「わざとリズムを強調した読み」が理解しやすいと答えた被験者が、高次脳機能障がいのある／なしや障がいの程度に関らず多かった。一方、男性アナウンサーでは、アナウンサーによって「棒読み」が理解しやすかったり、あるいは有意差が出なかったりした。

同様にして「棒読み」と「棒読みに音アラームを付加した読み」を比べた。非障がい者では 1 名の男性アナウンサーを除いて、いずれも「音アラームの付加」が有効であった。高次脳機能障がい者では、軽度であるか中・重度であるかによらず有意差が出なかった。つまり高次脳機能障がい者では、音アラームの付加が有効ではなかった。

被験者が知っている童謡を、リズムを付けない「朗読」とリズムを付けた「歌」で聞いてもらった。非障がい者であるか障がい者であるかや、障がいの程度によらず「歌」が理解しやすいという回答を得た。ただし有意差が出たケースは限られ、男女や声質によって有意差が出るアナウンサーが限られるということではなかった。

実際のテレビやラジオの放送では、緊急時には普段よりもリズムを強調した発話になるだろう。これまでは災害情報は男性アナウンサーが担当することが多かったが、きめ細かな聞き取りが求められる緊急災害情報では、女性アナウンサーの担当を増やすべきかもしれない。あるいは男性・女性のアナウンサーが交互にアナウンスすることが有効かもしれない。

今回使用した音アラームのパターン(NHKの緊急地震速報を使用)は高次脳機能障がい者には理解が難しかった。一方、慣れ親しんだ歌の「朗読」と「歌」では、聞き取りの条件は、非障がい者と変わらなかった。今後は、これらの知見に注目した緊急災害情報発信のあり方が考えられる。それと共に、なぜこのような結果が生まれるのかには、脳機能の機序などに未だ不明な点が多い。その本質的な解明は今後の重要な課題となる。